

会長の時間 ●富田会長

決議 23-24 に至るまでのロータリー創生期の物語は、ロータリーの目指すべき未来と還るべき源流のヒントがあり、興味が尽きることがありません。本日はその源流の一人、シェルドンについて述べたいと思います。

ロータリーはご周知の通り、1905年2月23日、親睦を目的としてシカゴで設立されました。そして、親睦を目的にしたものの、せっかく一人一業種で多くの仲間が集まったのだから、金儲けに繋げようという発想が、即ち、物質的相互扶助という考えが起りました。これは、1906年1月に制定されたシカゴ・ロータリークラブの定款に、会員の事業上の利益の促進と会員同志の良き親睦が目的と明記され、奉仕の概念はありませんでした。つまり、現代のロータリーの中核的価値とは違い、ロータリーの源流に於ける中核は、「親睦と事業繁栄」しかなかったと云えます。

ロータリーに奉仕の理念が持ち込まれたのは、1908年、アーサー・フレデリック・シェルドンがシカゴクラブに入会してからで、それは革命ともいえるべきものでした。

シェルドンは1868年生まれで、ミシガン大学の経営学部販売学専攻でトップの成績を修め、1902年シカゴにシェルドン・ビジネス・スクールを設立し、経営学や販売学を教えた経歴がありました。シェルドンがロータリーの奉仕の理念を持ち込んだのは、会員の事業の発展という目的を温存しながら、その具体的方法を従来の物質的相互扶助から、継続的に利益を齎す顧客を確保することによって事業を発展させようという経営学に転換する為でした。即ち、モラルや哲学の見地からではなく、飽く迄経営学から導入したことは注目すべき点と考えます。彼の“*He profits most who serves best*”というサービス概念は後の1911年のポートランド大会からロータリーの職業奉仕の中核理念となりますが、実は元々シェルドン・ビジネス・スクールの方針であり、経営学からの概念でありました。

シェルドンの奉仕理念は、「継続的な事業の発展を得る為には、自分の儲けを優先するのではなく、自分の職業を通じて社会に貢献するという意図を以て事業を営む、即ち会社経営を経営学の実践だと捉えて、原理原則に基づいた企業経営をすべき」と考えました。

更に「良好な労働環境を提供するのは資本家の責務であると考え、資本家が利益を独占するのではなく、従業員や取引に関係する人たちと適正に再配分することが継続的に利益を得る方法だ」と考えました。この「利己と利他の調和が奉仕」という考えは現代の持続可能な修正資本主義の先取りしたもので、当時、画期的な考えであり、これがその後のロータリーの発展の礎となりました。そして、シェルドンは持続して繁栄している企業の共通する特徴を「サービス」と名付け、奉仕とは顧客に満足を与えることと考えました。

ポール・ハリスはシェルドンの考えを受け、ロータリーの奉仕の理念について「物の過程の最初に奉仕を置くものである。即ち、奉仕第一、自己第二」と考えを改めました。

先週、OpenAIのアルトマン CEO 解任劇が話題となりましたが、目前に迫ったAIの未来について、G・オーウェルの小説の様な未来を望まず、シェルドンの様な奉仕の心ある未来を望む処ですが、これはロータリアンが活躍できる場となるかもしれません。